

数年前(1955)に私は年齢によって味覚が違ふということの本学会に於いて発表し、その後引き続き味覚の集団テストを行ってきたのであるが、この間各グループ100人~80人についての調査の結果、日本人の味覚の個人差ということは集団給食の際など参考になるのではないかと思った。此調査は昭和二十八年から三十二年まで五ヶ年に亘り、特に女子について調査した。味覚は年齢、習慣、性別、環境並びに各個人の生理状態によっても違ふので、出来るだけ同じ条件のものと思い、同じ年齢同じような環境のグループに空腹時の午前10時~12時までと午後3時5時までの間に行い、季節は初秋で20°~25°Cの期間に行った。実験法は全口腔法で呈味物質としては蔗糖(甘味)、食塩(鹹味)、クエン酸(酸味)、塩酸キニーネ(苦味)の基本的な味覚の閾値及び快適濃度を調べたのであるがその結果、各呈味物質に対する閾値のDistributionの様子はBlakeslee及びSalmon(1935)の状態に似ているが閾値は各呈味物質共Pfaffman(1951)の結果よりは低い。尚個人差は知能との関係があるのではないかと思い、このテストを試みたのであるが、大体知能の優れているものは閾値が低かった。殊に幼児、老年のグループに於いて顕著であった。